

日本語学会第148回大会発表要旨

The 148th Meeting of the Linguistic Society of Japan
Abstracts of Oral presentations, Poster presentations, and Workshops

期 日：2014年6月7日（土）・8日（日）

会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス

〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1

共 催：法政大学文学部

Dates: Saturday, June 7, Sunday 8, 2014

Venue: Hosei University, Ichigaya Campus

2-17-1, Fujimi, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8160, Japan

The 148th Meeting is cosponsored by Faculty of Letters, Hosei University

第1日（6月7日）

13:00–17:40 口頭発表（55・58年館6階, 7階）

第2日（6月8日）

10:00–12:00 ワークショップ（外濠校舎4階 S406, S407 教室）

11:30–12:50 ポスター発表（外濠校舎7階 薩埵ホールロビー）

13:40–16:50 公開シンポジウム（外濠校舎 薩埵ホール）

Day1

13:00 - 17:40 Oral presentations

(The 6th & 7th floor of 55・58 Nenkan Bldg.)

Day2

10:00 - 12:00 Workshops (Room S406, S407, Sotobori Bldg.)

11:30 - 12:50 Poster presentations (The 7th floor of Sotobori Bldg.)

13:40 - 16:50 Symposium (Satta Hall, Sotobori Bldg.)

■口頭発表（6月7日(土) 13:00-17:40)

[A-1]

1 人称心理文の非ノダ文／ノダ文に対する聞き手の認知
—話者に属する情報について聞き手に反応を求める場合—

京野 千穂, 堀江 薫

三人称主語の心理文は、非ノダ文が不自然でノダ文にすると自然となる。本研究は、聞き手に確認や共有を求める場合（＝上昇調終助詞ネを付加した場合）には、一人称主語でも心理文の非ノダ文が不自然となることを音声を用いた母語話者調査により検証した。その結果、心理文の非ノダ文＋ネは、聞き手が確認不可能で不自然とする値が高かったのに対し、動作非ノダ文＋ネは、聞き手が確認可能で自然であるとする値が高かった。更に、心理／動作ノダ文＋ネの自然さが高まるのは、聞き手に確認ではなく共有を求める場合であることが分かった。母語話者の回答から、動作ノダ文＋ネは、話者が事態の実現を意識的に捉える過程が伴うことが分かった。この過程は、Kuroda(1973)が捉えた心理ノダ文の認知過程と共通する。意識化の過程を経ることにより、内的直接的な捉えから間接的な捉えとなり、結果的に聞き手がアクセス可能な共有情報になることを論じた。

[A-2]

〈許可〉・〈禁止〉を表わす日本語の可能表現について

林 青権

本発表は、日本語の可能表現の表わす〈許可〉と〈禁止〉の内実を明らかにするために、可能表現と「－でもいい」・「－てはいけない」との比較を通して、可能表現の〈許可〉・〈禁止〉の意味用法を考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

- A. 可能表現の表わす〈許可〉と〈禁止〉は、基本的には制度・規則によるものであり、相手に「行為の実現が（不）可能である」といった行為実現の可能性を提示することによって、間接的に相手の行為に〈許可〉・〈禁止〉の機能を果たす。
- B. 可能表現による〈許可〉・〈禁止〉は、話し手（伝え手）は相手の行為の可否を直接に判断することを感じさせないように、行為実現の可能性の有無を伝えることで、間接的に相手の行為実現を認め（〈許可〉）、行為を実現しないことを要求する（〈禁止〉）ため、相手のフェイスへの侵害度が低く、「－でもいい」「－てはいけない」より丁寧に感じられるのだと言える。

[A-3]

アイロニー発話の誤解と乖離的態度の解釈

盛田 有貴

Wilson(2009)は、関連性理論に基づき、アイロニー発話を、話し手以外の誰かに帰属され (attributive)、話し手の乖離的態度を示す (dissociative) ものと定義付けている。しかし、Wilson(2009)の特徴付けでは、話し手の意図と、聞き手の解釈が一致する場合は説明が可能であるが、話し手の意図と聞き手の解釈が異なる誤解の場合を、適切に説明することができない。本発表では、Wilson(2009)の特徴付けの一つである乖離的態度に焦点を当て、これまで主張されてきた乖離的態度の規定は不十分であることを示す。乖離的態度をアイロニー発話の特徴として見なすには、話し手の発話の帰属元への態度表明のみならず、聞き手の視点からの規範や期待に対する態度の導入の必要がある。これを踏まえ、アイロニー発話の誤解を、聞き手による乖離的態度の誤解釈の結果として説明が可能であることを示す。

[A-4]

韓国語・英語副詞の心的距離分析

高 雅妃

本研究の目的は韓国語の副詞で「あとで」や *later* という意味を持ち類義語関係であるとされている *ittaga* と *nazunge* について意味論・語用論的分析を行い、これら 2 つは類義語関係ではないと論証することである。Lee(2007)では *ittaga* と *nazunge* の日本語の「あとで」/「のちほど」との対照の観点につて、*ittaga* は「のちほど」で *nazunge* は「あとで」と対応していると述べているが、本研究者はこれら 2 つは発話時点から動作時点までの時間的距離が異なると指摘し、時間的距離がどのくらい異なるのかを例証する。複数回にわたる韓国語母語話者を対象とする主観的内省調査の結果、*ittaga* と *nazunge* は発話時点から動作時点までの時間的距離が異なること、さらに時間的距離としての指示詞であると同時に心的距離も表現する真の *deixis* であることが判明した。また、*ittaga* と *nazunge* は英語の *later* に対応するののかも考えたい。

[A-5]

ガ格テアル構文を動機づける「発見性」について

高島 彬

日本語のテアル構文では被動作主をガ格、もしくはヲ格で表示するという二通りの類型があり、この格の交替は意味の側面にも影響を与えるとされてきた。本発表の目的は、Langacker の提唱する認知文法の観点からこのテアル構文を考察することで、テアル構文に見られる事態解釈と被動作主をガ格で表示する際の認知的な動機づけを明らかにすることにある。認知文法では、言語表現の意味は「概念内容(content)とその概念内容を解釈(construal)する特定の方法で構成されている」と考えられている。ここでの「解釈」とは同じ状況を様々な方法で知覚し、描く人間の認知能力のことである。本発表では、「テアル」に見られる事態解釈は被動作主の焦点化(focusing)であることを示し、被動作主をガ格で表示するテアル構文の焦点化には認知主体が概念内容の被動作主を知覚する状況から発見するという直接的な知覚経験が認知的な動機づけとなっていることを主張する。

[A-6]

日中改善要求表現に見られる事態認識の様式

李 国玲

本研究では、認知言語学的アプローチから疑問形式による改善要求表現の日中対照を行い、両言語における〈好まれる事態認識〉の様式を考察した。

日本語では、話者は基本的に恩恵・利益の受け手として聴者に改善してほしい事態に介在し、一人称代名詞の不使用により事態に没入しているように、主観的把握による働きかけ方を用いる。話者が聴者に改善してほしい事態に介在しない働きかけ方もあるが、丁寧さの関係で限られた場面でしか用いられない。

中国語では、話者は聴者に改善してほしい事態に介在せず、あるいは恩恵・利益の受け手として事態に介在しても一人称代名詞の明示により、客観的な状況把握としての「客体化」の現象が一般的である。兼語文(一種の使役構文)という複文構造で聴者に働きかける際に、【使役の要素〔聴者に改善してほしい事態〕】という構文形式で、主観的な状況把握と客観的な状況把握を併用する【主体化〔客体化〕】の現象が見られる。

[A-7]

Emotional discourse analysis:
an attempt at contrastive analysis of Japanese literary translations

Holoborodko Alexandra

This paper investigates some peculiarities of the Japanese emotional discourse (expressive emotion words, descriptive emotion words, metaphors and metonymy) through three Japanese translations of a Russian novel by F. Dostoevsky. A contrastive approach proved to be an effective tool for revealing emotion words (EWs), which could be challenging to Japanese-language translators and language learners. In this work, a comprehensive framework for studying emotional discourse is suggested: EWs are categorized, taxonomy of EWs is created, contextual analysis, with further ascertaining the means, strategies and difficulties involved in translating EWs into the target language, and the final sociological interpretation of EWs are performed. The work presents a structured overview of Japanese emotional language and some of its culture-specific peculiarities.

[B-1]

The Effect of the Choice of the Objects in Japanese Locative Alternation

Natsuno Aoki

Although the details are unclear, it is known from the literature that the choice of objects influences the acceptability of Japanese locative alternation. I argue that the choice of objects affects the acceptability in one of the following ways: (i) it may improve the Theme-object type construction (NP <Location> *-ni* NP <Theme> *-o* V) by pragmatically enhancing the inference on the manner of motion. Alternatively, (ii) the choice of objects may improve the Location-object type construction (NP <Location> *-o* NP <Locatum> *-de* V) by pragmatically enhancing the inference on the incorporation of the theme into the location. I presented the result from a questionnaire study supporting my hypothesis.

[B-2]

will be P 構文

平沢 慎也

I' ll be right down. 「すぐ降りていきますから」に現れるような will be P (P: particle) は言語的単位 (構文) をなしている可能性がある。そのように考えられるのは、will be P が頻度の高い言い回しであり、かつ will、be、P それぞれが will be P 以外のところで持っている意味・用法を足し合わせてもその意味・用法を完全には予測できないからである。will be P の特殊性は次の4点に集約される。①移動者の移動先に話し手ないし聞き手がいることが必要になる。②will が (準) 義務的になる。③be が〈状態〉ではなく〈変化〉を表すという解釈が優勢になる。④副詞 right との関連で、P を「単に前置詞の補部名詞句が省略されたもの」と考えるのでは説明できない振る舞いを示す。なお、本発表では P として主に単純な「中・外・上・下」の意味の in/out/up/down を想定するが、will be over/along/by や will be there/here、さらには will be back、will be home など他の [will be 場所副詞] 表現との関連にも言及したいと考えている。

[B-3]

VN 型漢語動詞に対する検討 — 「N+を+VN する」型表現を例に—

程 莉

本発表は、VN 型漢語動詞が項を取れるか否か及びその原因に対して、「VN のタイプが activity か accomplishment か achievement か」という視点から、一定の理解が得られることを示そうとするものである。具体的に取り上げるのは「N+を+VN する」型表現で、VN が activity 的な場合、項を取れず、表現「N+を+VN する」が不自然になりやすいのに対して、VN が accomplishment や achievement 的な場合、項が取られやすくなり、表現「N+を+VN する」が自然になりやすいということを実証的に示す。さらに、この違いをもたらす理由に関して、他動性という観点から説明できること、つまり、VN が activity 的な場合と比べて、VN が accomplishment や achievement 的な場合の方が他動性が高くなり、項が取られやすくなるからであるということをも論じる。

[B-4]

ホドを用いた因果表現の解釈と構造

東寺 祐亮

「内閣は議会で 80%の議員が反対するほどひどい法案を提出した」という文は、「内閣が提出した法案はとてもひどくて、80%もの議員が反対しそうなくらいだった」という解釈と、「内閣が提出した法案はとてもひどくて、実際に、議会で 80%もの議員が反対することになった」という解釈が可能である。つまり、前者の解釈においては、「議会で 80%の議員が反対する」というデキゴトは起きていないという解釈であるのに対して、後者の解釈の場合には、「議会で 80%の議員が反対する」というデキゴトが実際に起きているという解釈である。本発表では、ホドを用いた同様の構文が、常に後者の解釈を許すとは限らないということを指摘し、その観察にもとづいて、後者の解釈が可能になる条件をまとめる。さらに、この2つの解釈において、ホドの果たす役割そのものは同一であるという分析を提案する。

[B-5]

Chinese relative clause processing by native Chinese speakers: An eye-tracking study

Michael Patrick Mansbridge, Kexin Xiong, Katsuo Tamaoka

The current study aimed to address the question of whether native Chinese speakers process and comprehend subject-extracted relative clauses (SRC) more readily than object-extracted relative clauses (ORC) in Chinese. Presently, this has been a debated issue as numerous moving-window studies produce conflicting results. However, by using eye-tracking methodology, we are able to demonstrate processing costs associated with each relative clause by way of regression movements and reading times. These regressive eye-movements revealed that at the matrix subject for SRCs, participants were significantly more likely to regress back into the relative clause structure which demonstrates a high integration cost. Moreover, ORCs were processed faster within the relative clause with a higher comprehension rate. This establishes a clear ORC preference for Chinese.

[B-6]

日本語分裂文の ERP 研究 —使役形を用いた検討—

矢野 雅貴, 立山 憂, 坂本 勉

英語や日本語など様々な言語において、目的語関係節の方が主語関係節よりも処理負荷が高いことが知られている。この処理負荷の非対称性は、**filler** と **gap** の間に介在する節点の数が多いほど処理負荷が増大するという構造的距離仮説によって説明できるとされてきた。本研究は、この仮説によって、関係節文 (e.g. 花子が／を誉めた太郎) のみならず分裂文 (e.g. 花子が／を誉めたのは太郎だ) の処理選好性も説明可能かどうかを検証した。その際、解析器が **gap** を検出するタイミングを統制するために、動詞を使役形にした分裂文を用いた。事象関連電位を指標とした実験の結果、「動詞+使役+のは」位置において、使役目的語分裂文と比較して使役主語分裂文で、**P600 effect** が観察された。この結果から、日本語の使役形分裂文における **gap** と **filler** の統合コストは、それらの構造的距離よりも線形的距離によって決定されることが明らかとなった。

[B-7]

fMRI を使用した日本語の格助詞の処理に関わる脳活動報告

上田 由紀子, 橋本 洋輔, 中村 和浩, 内堀 朝子

本実験では、これまでの心理言語実験であまり区別されてこなかった、格助詞を伴う具象名詞と格助詞を伴わない具象名詞における脳活動を fMRI にて測定し、日本語格助詞の処理に特有の脳活動を観察した。実験は、格助詞を伴う具象名詞 (解釈可能 90 刺激:「はしが」、不可能 12 刺激:「がはし」と格助詞を伴わない具象名詞 (解釈可能 90 刺激:「はしら」、不可能 12 刺激:「らはし」) をランダムに、1 刺激 1.5 秒呈示+6 秒レストで、うち 3 秒の反応を取得。刺激は 3 モーラとし、格助詞以外の 2 モーラを同一音素のミニマルペアに揃え、解釈可能か否かの正誤判断を課した。解釈可能な格助詞を伴う具象名詞から解釈可能な格助詞を伴わない具象名詞を差分したところ、主に左運動前野外側部の賦活が観察された。一方、逆の差分では有意な賦活はみられなかった。これにより、格助詞を伴う名詞句の処理が単純な語彙処理とは異なる脳の部位で行われていることが明らかになった。

[C-1]

日本語の空項に関する研究：不動要素の観点から

坂本 祐太

日本語では、項が音声的に空の要素として現れることができる(Kuroda 1965)。これまでの空項の主な分析として、Kuroda (1965)の空代名詞分析、Otani and Whitman (1991)の動詞残余型動詞句削除分析、Oku (1998)の項省略分析の3つが挙げられる。本発表では、Oku (1998)やTakahashi (2008)に基づき、空項のスロッピー解釈と量化解釈の可能性を省略のテストとして仮定する。そして、イディオム表現と小節内に生起する不動要素に基づき(Kishimoto 2009, Kikuchi and Takahashi 1990)、空代名詞分析と動詞残余型動詞句削除分析では派生が困難である空項のデータを提示する。また、そのデータが項省略分析では上手く説明できることを示し、日本語において項省略の操作が可能であると結論づける。

[C-2]

アスペクトを用いた日本語における結果構文の統語的研究

山口 真史

Takamine (2007)は尊敬語化と「また」による意味解釈の差から、日本語の結果構文をSpread型とPolish型の2種類に分類し、これらの差は統語構造の違いから来ると論じた。しかし、本発表では日本語の結果構文にはTakamine (2007)の論じる差はないとし、同じ統語構造をもつと主張する。また、Takamine (2007)の統語構造の理論的問題点を指摘し、他の構造を提案する。結果句は補部に形容詞を選択するアスペクト句によって構成され、アスペクト句(以降Asp^{RP})の主要部には有界性を司る解釈不可能な素性[uB(oundedness)]があり、それを照合することができる解釈可能な素性[iB]を持つ形容詞が補部に選択される。さらに、Asp^{RP}の指定部には名詞句が生成され、形容詞と一致操作を行うことによってResulteeとして解釈される構造を提案する。本発表では一致操作にReverse Agreeを採用し、これによって結果構文が生成されると主張する。

[C-3]

補文からの繰り上げ

——一致に基づくアプローチ vs. labeling algorithm に基づくアプローチ——

大高 茜

本発表では、labeling algorithm (LA)に基づく補文からの繰り上げへのアプローチには、進化的・概念的、経験的な問題があることを指摘し、そして、繰り上げは、素性の一致 (agreement) によって惹起されると主張する。

Chomsky (2013)における A 移動の位置付けは、Chomsky (2008)におけるものとは大きく異なる。前者では、ラベルを決める仕組み LA としていくつかの方法が提案されているが、移動は、そのうちの 1 つに関与するものである。これは、概略、移動は、ラベルの決定を可能にするために惹起されるということである。後者では、移動は、素性の一致によって惹起される。

本発表ではまず、前者の LA に基づくアプローチ自体の問題点を指摘し (Chomsky (2014))、また、このアプローチでは、日本語の主語-目的語繰り上げ構文や日本語・英語のコントロール構文における「CP 補文からの繰り上げ」などを説明することができないことを示す。さらに、素性の一致に基づくアプローチによる分析を提示する (Ohtaka (2013), 大高 (to appear))。

[C-4]

日本語の引き剥がし構文と島の制約修復について

向 明栄茂

従来より、スルーシング構文などにおいて、ある要素が島を超えて摘出されて生成された非文法的文が、削除操作によって後に救出されるという事実が報告されている (Ross 1967)。しかし、日本語の引き剥がし構文において、焦点句が島を超えて摘出された際に、削除による救出が不可能な場合も存在する。先行研究では、焦点句が移動した時の痕跡が PF で解釈不可能であると仮定すると、その痕跡の有無が島の制約修復の可否に関わるとされている (Merchant 2004, Nishigauchi 2010)。本発表では、先行研究の分析の問題点を指摘し、代替案として島の制約修復の例外は、LF での並行性の条件違反によるものであると提案する。

[C-5]

Toward a classification of *de*-phrases in Japanese

Kaori Miura

One of the long-standing issues in most generative theories is how to fit “non-core arguments” in their phrase structures (Pylkkänen 2008, Bosse et al. 2012, Bruening 2013). An example of this problem is *de*-phrases in Japanese. Although they are often described as adjuncts in the literature (Hasegawa 1990, Ura 2000), this study shows that not every *de*-phrase follow the properties of what the adjunct is. Hence, a thorough examination of their syntax and semantics is still called for. Based on Bruening’s (2013) theory, I propose that Japanese *de*-phrases are divided into two types: one having Voice feature and the other having V feature, comparing their instrumental use and locative use of certain motion verbs (e.g., *aruku* ‘walk’, *hasiru* ‘run’).

[C-6]

Puzzles with the Subject Position in Irish

Dónall P. Ó Baoill, Hideki Maki

This paper points out two puzzles that arise from the syntactic phenomena involving the subject position in Irish. First, a *wh*-phrase in the subject position may co-occur with an adjunct *wh*-phrase in CP SPEC. This is a puzzle, as the corresponding English sentence is totally ungrammatical. Second, a phrase in the subject position cannot undergo Heavy NP Shift (HNPS) in Irish, in spite of the fact that the position seems head-governed by the verb. We will argue that these puzzles suggest (i) that Irish allows *wh*-phrases in situ not to raise to CP SPEC throughout the derivation, (ii) that HNPS is triggered by agreement with *v*, not T, in Irish and English, and (iii) Irish is an ECM-less language.

[C-7]

On the Absence of the Wh-Island Effect in Modern Inner Mongolian

Lina Bao, Shogo Tokugawa, Megumi Hasebe, Hideki Maki

It has been pointed out that argument wh-phrases in situ in Japanese (Nishigauchi (1986, 1990) and Watanabe (1992), among others) and Korean (Yoon (1999)) show the wh-island effect, which indicates the tendency that argument wh-phrases in situ in Altaic languages show the wh-island effect. This paper then investigates whether yet another Altaic language, Inner Mongolian (Mongolian, hereafter), will show the same tendency. Based on the newly found data, we argue that (i) Mongolian wh-phrases in situ, whether they are argument wh-phrases or adjunct wh-phrases, do not show island effects, and (ii) that there are three types of languages of wh-in-situ with respect to the behaviors of argument and adjunct wh-phrases, namely, Japanese/Korean type, Chinese/Sinhala type, and Mongolian type.

[D-1]

上海語変調におけるピッチ下降の音韻特性：実験音韻論的考察

高橋 康德

上海語の変調では、第3音節以降でピッチが一律に下降する（陽入が第1音節の場合は除く）。このピッチ下降に関して、【1】「デフォルトトーン」による解釈と【2】「バウンダリートーン」による解釈が提案されてきたが、3,4音節語の分析ではどちらも同じような表層表示を導くことが可能なため、どちらの解釈が妥当なのかを判断できなかった。

本研究では、2音節語のピッチ実現に注目して上記2つの解釈の妥当性を検証する。2音節語ではデフォルトトーンは挿入されないが、バウンダリートーンは必ず指定される。これはすなわち、上記2つの解釈が2音節語で異なる音韻表示を予測することを意味する

2音節語の第2音節のピッチを計測し3,4音節語と比較した結果、ほとんどのケースで2音節語のピッチが有意に低いことが判明した。この結果は、バウンダリートーンの分析でのみ解釈することが可能である。

[D-2]

アイスランド語ストレスアクセント試論

三村 竜之

アイスランド語はストレスアクセントの言語であり、常に語の第一音節に主強勢が置かれると唱えられてきた。しかし例外が数多く存在するにも拘らず、先行研究では例外的な強勢の型の生起条件に関する論及が皆無に等しい。また先行研究は、強勢の存在を認定する音声的基準を明確にせぬまま強勢の位置について論じており、論証に不備や問題点が残る。

そこで発表者は、先行研究における資料の不備を補うべく実地調査を行い、採取した一次資料の分析を通じてアイスランド語のストレスアクセントに関して以下の 3 点を明らかにする: 1) V(C) 以外の構造を有し語中で最も高い音調を伴う音節が主強勢を担う; 2) 語種や語構造に拘らず語の第一音節に主強勢が置かれる; 3) 但し、語のタイプ (アルファベット頭文字略語) や意味特性 (dvandva、人名)、馴染みの度合いに応じて例外的に第一音節には主強勢が置かれない。

[D-3]

日本語の複合語におけるアクセント移動は言語構造によるものか?

松浦 年男

日本語の後部要素が二字漢語で構成される複合語 (例: 耳学問) において、アクセントが移動する (例: ミミガク]モン~ミミガ]クモン) のは当該の二字漢語が挿入母音 (学/gaku/ の/u/) を含むからだという仮説がある。本発表ではこの仮説が妥当かについて検証すべく、後部要素に二字漢語を含む複合語 90 語を 5 名の若年層話者に発話させる実験を行った。その結果、二字漢語におけるアクセントの移動はごく一部の語彙に限られ、その頻度も「卵」(タマ]ゴ→ジンコウタ]マゴ) のような 3 モーラ和語に比べて低かった。もし二字漢語におけるアクセントの移動が挿入母音という言語構造に由来するものならば、単語に関わらず移動は見られるはずで、生起率も低くないことが期待されるが、実験結果はこの仮説を支持しておらず、むしろアクセントの移動は個別語彙に依存する現象であることを支持している。

[D-4]

Lexical-specific or rule-based *rendaku* by native Chinese and Korean speakers learning Japanese

Katsuo Tamaoka, Kyoko Hayakawa, Timothy John Vance

Second language (L2) learners of Japanese are expected to display a clear contrast between rule-based *rendaku* consistently appearing in early-stage learning and lexical-item-specific *rendaku* at later stages as a result of memory-based lexical learning. Native Chinese ($N=32$) and Korean ($N=32$) speakers learning Japanese, matched for both lexical/grammatical knowledge and length of stay in Japan, avoided applying *rendaku* in compounds with a voiced obstruent in the second element, indicating that Lyman's Law is an active principle even in relatively early-stage L2 acquisition. Both L2 learner groups also showed sensitivity to lexical strata by distinguishing *wago* from *kango* and *gairaigo*. Thus, Lyman's Law and lexical strata can be considered factors in rule-based *rendaku*. In contrast, both L2 learner groups showed a low occurrence of *rendaku* for both Lyman's Law exceptions (i.e., $X+basigo$) and $X+zyootyuu$. These instances can be considered memory-based, lexical-specific *rendaku*, which L2 learners must acquire as individual lexical items.

[D-5]

統語的複合動詞の獲得 —CHILDES を使用した実証研究—

木戸 康人

本発表では、影山 (1993)による日本語の複合動詞研究に基づいて、日本語を母語とする幼児が統語的複合動詞をいつの時期から発話するのかという問いに焦点を置いて質的コーパス分析を行なう。この問いを明らかにするために、複数の幼児の産出した発話が記録されている CHILDES データベース (MacWhinney 2000)の中から、四名の幼児 (ArikaM (3:00:02-5:01:09), Nanami (2:11:28-4:09:16), Sumihare (0:00:00-6:11:28), Tai (1:05:20-3:01:29))を取り上げ、彼らの発話の中から大人の文法において統語的複合動詞に分類されるものをコーパス内から抽出した。検証の結果、幼児が産出する統語的複合動詞には、繰り上げ構文に分類されるものを初めに発話し、その次に制御構文に分類されるもの、そして、「直す」のように $V2$ が補部に V' を取るものを発話するという順序があると提案する。

[D-6]

日本人英語学習者の文産出における主語動詞一致誘引

遊佐 麻友子, 金 情浩, 小泉 政利

主語が異なる数(単数・複数)の2つの名詞から成る[NP N₁ [PP P N₂]]の構造を持つ場合に、動詞から線形的に近いN₂が、誤って主語動詞一致を誘引する現象が、英語母語話者の研究で報告されている(e.g., *The key to the doors *are* missing.). 主語動詞一致のない日本語を母語とする英語学習者が、このように複数の名詞を含み主語が複雑な場合に、動詞との一致をどのように産出するか明らかにするために、文完成課題を用いた実験を行った。

その結果、日本人英語学習者が、主語動詞一致の処理において **Shallow Structure** 仮説に反して、詳細な統語構造を用いた処理を行っていることが分かった。しかし、一致誘引を引き起こす N₁ と N₂ の数の組み合わせは母語話者とは異なる傾向を示したことから、日本人英語学習者の母語が英語の産出に影響している可能性が示唆された。

[D-7]

情報の流れが日本語のかき混ぜ文理解に与える影響：幼児と成人母語話者の比較

鈴木 孝明

成人母語話者と幼児の文理解における情報の流れの影響を探るため、日本語の SOV 語順と OSV 語順の文を対象とした文理解実験を行った。33名の成人母語話者と同数の幼児(平均年齢 = 6;2)を対象に、時限付き絵画選択課題とセルフペースト・リスニング課題による調査を行ったところ、成人の場合、かき混ぜ文が旧情報-新情報という情報の流れの中で提示されると文理解が容易になった。また、旧情報の処理には語彙プライミングが起り、成人はこれを利用した文処理を行っていると考えられる。これに対して、幼児の文理解に情報の流れによる効果は認められなかった。正しい文解釈に至る過程で、旧情報による語彙プライミングが貢献しているということはなく、この点で、幼児は成人とは異なり、情報の流れを効果的に利用した文処理を行っているわけではないと考えられる。

[E-1]

近代日本語書き言葉の主語標示助詞使い分け
—視覚準拠モデルによる各助詞使用頻度分布の解釈—

廉田 浩

近代日本語の主要な主語標示助詞ガ・ハ・ノについて、上接名詞句、下接述語句、出現節の種類に関する使用頻度分布を調べ、所謂「ガとハの使い分け規則」の無標的(骨格)部分として、(1)強従属節内主語：ガ付、(2)主節1人称主語：ハ付、(3)主節普通名詞(句)主語の動的表現：ガ付、(4)同静的表現：ハ付、という結果を得る。この結果を説明するため、実空間、時間、および構文空間を含む抽象的な「記述空間」とその中での視点と視野という視覚準拠モデルを考える。記述空間内で、複数対象を見る広視野モードがハ付に対応し、単一対象を見る狭視野モードがガ付に対応すると仮定し、視点が主語の内部位置にある内視点と外部にある外視点の枠組みを組み合わせると、上記使用頻度分布、即ち「使い分け規則」の無標的部分は合理的に説明することができる。更に視野と視点の通常とは異なる組み合わせを想定すると、同規則の有標的部分に対しても統一的な説明が可能になる。

[E-2]

Anticausatives and *Ar*-intransitives in Kesen

Fumikazu Niinuma

In this paper, I will investigate the nature of *ar*-intransitive verbs in Kesen, and provide a syntactic treatment of the *ar*-intransitives in this language, focusing on the contrasts in (1):

- (1) a. *agu* 'to open (intransitive)' *agaru* 'to open (intransitive)'
b. *noru* 'to ride (intransitive)' *nosaru* 'to ride (intransitive)'

Assuming that *ar* is a verbalizer, which takes VP as a complement (cf. Nishiyama (2000)), I will propose that the verbalizer *ar* is licensed by a Cause head, and it requires the implicit external causer argument (cf. Alexiadou (2010)). Finally, I will consider the *ar*-intransitives in Standard Japanese, and show that the main functions of *ar* in Kesen and Standard Japanese are identical (cf. Suga (1980), Shiraiwa (2012)).

[E-3]

日本語の「-おく」における史的変遷

一色 舞子

本研究では、日本語の「-おく」を取り上げ、後項「おく」の意味拡張および補助動詞化を含んだ史的変遷の様相を明らかにする。その上で、「動詞+動詞」形式における後項の補助動詞化が、日本語の複合動詞成立の意味的指標となり得るか否かについて検討する。百留(2001)(2002)では、音韻・形態的指標のほか、後項の補助動詞化を動詞間のまとまりが強まった後に起こる現象であるとし、複合動詞成立の有効な意味的指標であると述べている。しかし、本研究によって、「-おく」の場合は上代から現代に至るまで動詞間の形態的緊密性は一貫して低く、複合動詞として語彙化しないまま、後項「おく」が「テ形補助動詞」として文法化したことが明らかとなった。よって、本研究では、後項の補助動詞化が複合動詞成立の指標とはならない事例もあることを述べ、「動詞+動詞」形式における後項の補助動詞化が、動詞間の形態的緊密性の獲得とは別に生じる現象であることを主張する。

[E-4]

係り結びがもたらす疑問助詞の分布制約 ―日本語史と琉球語から―

衣畑 智秀

古代日本語には、カによる係り結びが存在したが、カによる選言・間接疑問・不定（以下「不定構文」）は存在せず、係り結びが衰退した 15 世紀から、カによる不定構文が表れた。本発表では、このような係り結びと不定構文との相補性が、偶然によるのか否かを検証するために、現在も係り結びが使われる琉球語宮古方言を調査した。その結果、カのような疑問専用の係り結びを持つ宮古島南部方言では、その係り結びの形式が不定構文に使われることはなく、疑問専用の係りを持たない北部方言では、疑問の助詞が不定構文を形成するために使われていることが分かった。このことは、係り結びの形式と不定構文の形式の相補分布が偶然とは言えないことを示している。係り結びと不定構文は主文に起こる現象か否かという点で異なるが、本研究の結果、係り結びの主文生起性は、共時的な文法の中で、他の構文の形成を抑制するように働いていることが新たに分かった。

[E-5]

スキーマを用いたノダの多義構造分析

笠井 陽介

多義構造を記述する際、多義性をスキーマ的に分析する方法とプロトタイプの分析する方法がある。ノダの多義構造は、従来「説明」や「関連付け」といった基本的な意味・機能からの派生として、プロトタイプの分析されることが多かった。しかしながら、「説明」を表さないノダが存在することは吉田(2000)で、「関連付け」を表さないノダが存在することは野田(1997)で指摘されており、それらの“周辺のな”ノダを基本的意味・機能からの派生として記述する妥当性には疑問が残る。そこで本発表はノダの多義構造記述にはスキーマ的分析が有効であることを主張する。動詞語彙・形容詞語彙の名詞化に言及した池上(1978)と国広(2002)を参考に、ノダに<文の伝達内容を既定化・恒常化・一般化させる>というスキーマを設定したうえで、吉田(1988)のいう“狭義の「のだ」(平叙・現在)”を考察対象とし、そのスキーマを用いたノダの多義構造分析の有効性を主張する。

[E-6]

発話伝達のモーダル形式と日本語の授受動詞の周辺の用法

長谷部 郁子

本発表で扱うのは「志望校に受かってやる」のような日本語の「て+授受動詞」の周辺の用法である。これらの表現は「本をやる」のような授受動詞が語彙的に有する本来的用法とは異なり、話者の意思を伝達する発話行為を表すので主語は省略可能な1人称に限られ現在時制のみで用いられる。本発表ではこうした周辺の用法を「真正モーダル表現」の発話伝達のモーダル形式(上田(2007))として分析し、統語派生においてはCPシステムの一部である機能範疇U-ModalPの主要部に基底生成され、この主要部は[+Modal]素性を備え指定部に[+Speaker]素性を要求すると主張する。また、長谷川(2007)を基に、本来的用法の授受動詞はTP以下の「命題」を表す投射の主要部として実現されると仮定し、話者の「視点」(澤田(1993))と「心的態度」と関わりをCP内のモダリティ表現との[+Modal]との素性照応に還元する。最後に語彙的モーダル表現が機能的なものに拡張される可能性やモダリティの多重性についても論じる。

[E-7]

容認性判断実験に基づく日本語複数名詞の意味の考察

野元 裕樹

従来、日本語の複数形名詞（NP タチなど）は、英語の複数形名詞と異なり、指示対象が複数体（plurality）のみから成り、単一体（singularity）を含むことはないとされてきた（Mizuguchi 2004, Nomoto 2013 など）。これに対し、Kaneko (2013)は、NP タチに単一体指示を強いるような文の適格性を問う容認性判断実験の結果に基づき、日本語の複数形名詞も実は単一体を含むと主張した。本発表では、Kaneko の実験の追認実験と、条件を変えた追加実験の結果を報告する。前者は 5 文を提示したのに対し、後者は 2 文を提示した点で異なる。以下の 2 点を指摘する。①5 文提示する場合、2 文の場合に比べて複数形名詞が単一体を含む解釈に対する容認度が上がる。②追加実験の結果は複数形名詞の数に関する性質でなく、複数形名詞に付随する（特）定性を反映する。

[F-1]

ハワイ語「方向詞」に関する数的分布

岩崎 加奈絵

ハワイ語の機能語「方向詞」は、先行する動詞の指す行為の向きを示す働きをする（行く・来る等の空間移動に加え、やりもらいや抽象的移動も含む）。aku<離れる>、mai<近づく>、a 'e<上へ>、iho<下へ>の 4 語が該当する。

本発表では 1900 年前後のテキスト資料を中心に「各方向詞の延べ語数」「方向詞とよく共起する動詞」のデータを取り、考察を加えた。結果は次の通り。

・多くの動詞は、行為の物理的制約に拘らず、特定の方向詞と共起する傾向がある。

一対一対応のほかでは、(1) aku-mai（「参照点」による直示的対立軸）と共起しやすい動詞、(2) a 'e-iho（絶対軸）と共起しやすい動詞、の 2 類が基本である。

・一方で、全ての方向詞と一定数共起する動詞もある。

-そのうち出現頻度の高い動詞は、方向詞 4 語の出現頻度の比とほぼ同じ比で、それぞれの方向詞と共起する。

-出現頻度の低いものでは、上述(1)(2)のグループに加え、(3)aku と共起しにくく a 'e と共起しやすい変則型が見られた。

[F-2]

イロカノ語バギオ方言における移動動詞を含む動詞連続構文

山本 恭裕

イロカノ語（オーストロネシア語族マレー・ポリネシア語派北部フィリピン語群）には二種類の動詞連続構文があるとされている。一つは、前に様態動詞、後ろに移動経路動詞を持つ構文である。そしてもう一つは、前に直示移動動詞、後ろに有意志動作を表す動詞を持つもので、日本語で言うところの「一しに行く/来る」という意味を表す。本研究では *Role and Reference Grammar* の枠組みから、それらの動詞連続構文の節の結合レベルや依存関係の有無などを議論し、構文のより細かい特徴付けをする。結論としては、一つ目の移動経路と様態を表す構文は述語同士が結合しており、また依存関係も有するので、結合度が最も高いと仮定される内核接続・連位接続に当たる。もう一方の直示移動構文は、前の直示移動動詞が項を取れないなど脱動詞化が進んでおり、述語として機能していないため、動詞が連続している構文とは見なせない。

[F-3]

The search for the "Lost" Auxiliaries:

Motion clauses and imperfective aspect in Kalanguya, Northern Philippines

Paul Julian Santiago

The goal of this study is to provide an explanation for the occurrence of pre-predicate pronouns in pragmatically neutral imperfective (1) and motion ('go') clauses (2) in Kalanguya (Nuclear Southern Cordilleran).

- | | |
|------------------------|-------------------------|
| (1) Kami man-ʔobla. | (2) ʔida ka-man-happit. |
| 1PL.NOM AF:PRSP-work | 3PL.NOM IPFV-AF-speak |
| 'We will go and work.' | 'They are speaking.' |

I will argue that auxiliary-axing, a process where the clause-initial auxiliary was lost, leaving the clitic pronouns stranded before the main verb, accounts for this structure (see Starosta, Pawley and Reid, 2009). I will also attempt to reconstruct the original form of these 'lost' auxiliaries and propose some possible paths of development after the loss based on the investigation of other clause-initial auxiliaries in Kalanguya and other related languages.

[F-4]

タガログ語の pa-形

長屋 尚典

本発表では、タガログ語の pa-形の形式と機能を包括的に記述する。これまで pa-形についてまともに扱った研究はなかったが、移動表現などを中心によく使用され重要である。本発表の主な発見と主張は以下の通りである。第一に、pa-形の形成方法には、動詞語根に pa-をつける方法と場所に関する名詞に pa-をつける方法がある。どちらも生産的である。動詞語根から形成される場合には最終音節に強勢がくる。第二に、pa-形には大きく分けて、様態、経路、将然相の3つの意味が存在する。第三に、pa-形の3つの用法の共通点は「語根で表される動作や状態が実現されようとしている（がまだ実現はしてない）」というところにある。このスキーマ的意味は pa-形が虚構移動に用いられることからよくわかる。第四に、pa-形の統語機能には述語と付加詞の二つが存在する。述語として現れた場合には pa-形とその補語の間に他の要素が出現してもよいが、付加詞の場合は不可能である。

[F-5]

アショー・チン語における人称標示と inverse marker *mǎ-*

大塚 行誠

本発表ではミャンマー連邦共和国ヤンゴン市におけるアショー・チン語（チベット・ビルマ語派クキ・チン語支南部チン語群）の人称標示を考察の対象として、人称助詞および動詞接頭辞 *mǎ-* の形式と機能について報告する。そして、動詞接頭辞 *mǎ-* が逆行形標識 (inverse marker) としての機能を持ち、他動性の高い事象を表す文で発話行為の参与者 (speech-act participant) に動詞句の表す行為が及ぶ場合、動詞接頭辞 *mǎ-* が動詞の直前に付加するという特徴を明らかにする。また、その他のクキ・チン語支の言語における人称標示と対照して、逆行形標識の存在が北部チン語群と南部チン語群の一部の言語で特徴的な文法現象であることを述べる。

[F-6]

ラワン語の再帰接辞-shiに関する一考察

大西 秀幸

ラワン語における -shi は LaPolla(2000 他)では再帰を表す接辞であると説明されており、-shiを用いない他動詞文と、話し手自身（またはそれに近いもの）を行為の対象とするか否かにおいて対立する。しかし、発表者の収集した一次資料からの例をみると -shi は必ずしも再帰的な意味を表現することに限定されず、事象が一時的なものではなく恒常的な状態であることを示す例が見られる。

このように、-shiは再帰を表す接辞であるという説明は不十分である。発表者は -shi が他動性を低める接辞であると主張する。すなわち、ラワン語では目的語が主語と独立した個体である事象の原型となる構文が他動詞文でコード化される (LaPolla 2011 他)。そして -shi が付加されることで目的語は個性性が低まり（その結果、目的語は主語に対してある種強いつながりのあるものとして解釈される）、結果として、事象は自動詞文でコード化される。一方で、目的語が人称代名詞の場合など個性性の担保されているような場合は、恒常性などの意味特徴を付加することで事象の他動性を低める。

[F-7]

チャイレル語の系統再考

藤原 敬介

チャイレル語とはインド・インパール盆地ではなされていた言語である。系統的にはチベット・ビルマ語派サル語群に属する。チャイレル人はルイ系民族であるので、サル語群中の下位語群であるルイ語群に属するという説が有力である。

ただしチャイレル語は死語であり、言語資料としては 19 世紀なかばに記録された 400 項目程度の語彙資料しか存在しない。この資料を再検討した結果、(1) ルイ語群に特徴的な文法形式 (A. 類別詞のあとに数詞の一がくるという辞順、B. 否定接頭辞 *a-、C. 移動助動詞 *-a、D. 動作主複数助動詞 *-k/hi) が確認されない、(2) ルイ語群にのみ特徴的な語彙は数語しか確認されない、(3) サル語群に属するさまざまな言語の語彙が散見される、といった事実がわかった。以上より、チャイレル語がサル語群に属することは确实だが、典型的なルイ語群の言語とまではいえないことがあきらかとなった。

[G-1]

ウズベク語における欠如を表す形容詞派生接辞・*-siz* について

日高 晋介

ウズベク語の *-siz* は、形容詞を形成する接辞であり、名詞語幹で表される事物の欠如・不足を表すとされている。ウズベク語には、*-siz* と意味的に対称な *-li* という接辞もあり、名詞語幹で表される事物の所有を表すとされている。従来のウズベク語の研究では、*-siz* と *-li* の意味的な対照性のみが注目されている。管見の限りでは、このような両者の形態統語的ふるまいの差異に注目した先行研究は存在しない。

本発表では、欠如を表す *-siz* の形態統語的ふるまいを、所有を表す *-li* と対照しながら記述する。そして、両者の差異として、*-siz* は前部要素に複数接辞や所有人称接辞を含む名詞語幹・人称代名詞・指示詞をとることができるのに対し、*-li* はこれらの前部要素をとることはできない、ということ指摘する。以上の考察を基に、*-siz* は「統語的派生名詞」(Vinokrova 2005, 江畑 2011: 122) であると結論づける。

[G-2]

モンゴル語の否定小辞の自立度

梅谷 博之

モンゴル語には「小辞」と呼ばれる不変化詞（屈折による語形変化をしない語）がある。本発表では「小辞」のうち、動詞の前に現れて否定や禁止を表す *bitgij*, *büü*, *ül* の 3 つを取り上げ、それらの自立度が一様ではないことを明らかにする。記述に際しては、「単独で発話されるかどうか」「小辞と動詞の間に他の語が現れるかどうか」「小辞+動詞の組み合わせに派生接辞が付加されるかどうか」などの点に着目する。また、先行研究の中には、モンゴル語の「小辞」の一般的な特徴として（語形変化しないことに加えて）、語としての自立度が低いことを挙げるものがある。しかし本発表で明らかになるように、語形変化はしないが高い自立度を有する「小辞」も存在する。すなわち、「小辞」が「語形変化しない」及び「自立度が低い」という 2 つの特徴を必ずしも併せ持つとは限らず、この 2 つの特徴は分けて考える必要があると言える。

[G-3]

ブルシャスキー語の動詞の連体修飾構造

吉岡 乾

動詞の連体修飾構造は多くの言語で様々な手法を用いて構成されている。ブルシャスキー語の場合、(i) 非定形動詞による連体修飾構造を取るか、(ii) 定形動詞と疑問詞・接続詞・指示詞などを用いた関係化構造を取るかの、2つの選択肢がある。

- | | | | | | | |
|------|--------|------|-----|-----------------|----------|-------------------|
| (i) | sabuúr | dzáa | áie | girmínun | (ité) | q ^h át |
| | 昨日 | 私の | 娘が | 書いた(participle) | その | 手紙 |
| (ii) | sabuúr | dzáa | áie | bésan girmínun | ké (ité) | q ^h át |
| | 昨日 | 私の | 娘が | 何を 書いた(finite) | 接続詞 | その 手紙 |
- 「昨日私の娘が書いた手紙」

本発表は、フィールドデータを基にして、それらの構造を関係化構造の類型論に照らし合わせてまとめると共に、接近可能性階層 (Accessibility hierarchy ; Keenan and Comrie 1977) 上でそれぞれの構造がカバーする範囲の差を明確化することを目的とする。そして、ブルシャスキー語の場合、Gap strategy の連体修飾構造よりも、情報保持率の高い Relative-pronoun strategy の関係化構造のほうが、より接近可能性の低い名詞句まで修飾できることも明らかにする。一方で連体修飾構造は、(一部の) 外の関係の連体修飾もできることが判った。

[G-4]

オリア語の複合述語にかかる人称制限

山部 順治

本発表は、オリア語 (インド東部、印欧語族) で、一連の述語 (種々を一括して“複合述語”と称す) の構文において効く人称制限について、事実報告・文法的分析を提示し、動機づけを説明する。

該当する述語は、他動詞文 [A が O を v する] を埋め込んでできた複雑述語 2 種類 (模式的に①②)、および与格主語をとる述語 2 種類 (③④)。

- ① X が[A が O を v する]のを許さない
- ② [A が O を v する]ことになる
- ③ A が O を好きだ
- ④ A が O を思い出す

これら 4 構文においては (また 4 構文においてのみ)、O が一人称・二人称であってはならない。発表では、4 構文を、同制約から免れる似た他構文と対比していく。

オリア語の同制約の現れ方と、諸言語の他動詞文 (A が O を v する) の格標示に関する規則性 (Silverstein 1976) との間には、構造的類似点がある。同制約の存在は、人称階層の働きによって (この通言語的規則性と類似の仕方) 動機づけられていると説明できる。

[G-5]

アルタイ諸語における文法化の段階的分布 — 「知る」に由来する可能表現から—

山崎 雅人

アルタイ諸語には「知る」に由来する可能表現がある。トルコ語 *Türkçe konuşabilir misiniz?* 《トルコ語を話せるか》朝鮮語 *운전할 줄 알아요.* 《運転ができます》満洲語文語 *niyalma be jeme bahanambi* 《人を食べることができる》モンゴル語 *Энэ хүмүүсийг эмчлэхгүй бол үхэж мэднэ.* 《この人達を治療しないと死ぬかもしれない》中国語「会」も可能表現であり「分かる」も意味する。これらを各語の他の可能表現と比べると、トルコ語は最も文法化程度が高く、一般的行為にも使える点で漂白化しており、許可などの対人的モダリティ表現に主観化が見られる。朝鮮語や満洲語文語で「手段を理解する」の意味から技能行為に使われるのは保持化と見なせるが、前者は二種の可能表現のひとつで、三種のひとつである後者より汎用化し文法化程度は高い。モンゴル語は可能性への言及で最も文法化が低い。

[G-6]

現代朝鮮語の「言いさし」における節の構造とモダリティの関係について

黒島 規史

本発表では、現代朝鮮語の「言いさし」における節の構造と、それが表すモダリティの意味との関係を明らかにする。主節を伴わずに従属節のみで現れる「言いさし」文において、節が小さく文らしさに欠けるほど話者の心的態度を「表出」させるかのような意味を表し、節が大きく文らしくなるほど、「対事態モダリティ」、「対聞き手モダリティ」をも表す傾向がある。節の大きさは、①節の内部にテンス形式を持ちうるか、②引用節を含みうるか、③丁寧さを表す *-yo* と共起しうるかということを基準にした。例えば比較的小さい節のことを考えてみると、接続語尾 *-myense* はテンス形式のみを含むときは「言いさし」において「～くせに」という「表出」的意味を表す。一方、節の内部に引用節をも含む比較的大きい節のときは「～なんですって？」と聞き手に伝聞内容を確認する「対聞き手モダリティ」に近い意味を表すようになる。

[G-7]

接辞・接語・複合の左右非対称性：統一的理解に向けて

浅尾 仁彦

接頭辞が接尾辞より類型論的に稀であり、また、接頭辞は接尾辞よりも語幹からの音韻的な独立性が高いという非対称性がある。本発表では、同様の非対称性が接語・複合でも見られることを指摘したうえで、これらの観察を、形態素の種類を問わず「音韻的な単位に対して、終了位置近くに形態的な境界を置くことが好まれる」、また「形態的な単位に対して、開始位置近くに音韻的な境界を置くことが好まれる」と要約することができることを主張する。そのうえで、接辞の非対称性に説明を与えることを試みた既存研究をまとめ、接辞・接語・複合の非対称性を最も統一的に説明できるのは、「音韻的単位の開始直後に形態素境界があると理解しにくい」という、言語理解のメカニズムに基づく心理言語学的説明であることを論じる。

[H-1]

アラビア語の *al-maf'ūl li-'ajl-i-hi* (object of cause)の再考察

松尾 愛, イハーフ・アフマド・エベード

アラビア語の *maf'ūl* (accusative noun) には、代表的なものとして、*al-maf'ūl bi-hi* (direct object), *al-maf'ūl al-muṭlaq* (absolute object), *al-maf'ūl fi-hi* (locative object), *al-maf'ūl ma'a-hu* (object of accompaniment), ***al-maf'ūl li-'ajl-i-hi*** (object of cause [lit. 'that for which it is done']), *at-tamyīz* (accusative noun of specification), *ḥāl* (accusative noun of circumstance)があるとされる。'Id(1994: 444)では、***al-maf'ūl li-'ajl-i-hi***は、先行する出来事に対する理由を表す、心理的な *maṣdar* (動名詞) で、先行する出来事と動作主が同一で同時である必要があると述べている。

本発表では、心理的な動名詞でないものでも ***al-maf'ūl li-'ajl-i-hi***と分類しうるものが存在することを抽出した例文から示した。更に、***al-maf'ūl li-'ajl-i-hi***には大きく2つの下位分類 ([目的]および[理由]) が存在し、[目的]を示す *min 'ajl-i* (for the sake of...)で言い換え可能なものと、理由を示す *bi-sabab-i* (because of ...)で言い換え可能なものとに分けることができることをエジプト人4人からのアンケート調査により明らかにした。***al-maf'ūl li-'ajl-i-hi***とされる用例の中には、【目的】の場合には心理的な動名詞でないものがあること、一方、[理由]の場合には心理的な動名詞のほか、人の**性質**を表す動名詞も用いられることを明らかにした。

[H-2]

ベンデ語（タンザニア、バントゥ F12）の持続相標示 *sí-/syá-*

阿部 優子

バントゥ諸語の動詞に特徴的なアスペクトである *Persistentive* 標示（バントゥ祖語では**kí-*と再建される）が指示する典型的な意味は「まだ～している」である。しかしながら、ベンデ語における *Persistentive* の継承形（*sí-/syá-*）は、周辺言語よりも比較的パターンが多く、2つの形式（*sí-/syá-*）を持ち、3種類の意味が区別され、4種類の構文で現れ、それらが5種類すべての時制で現れる。

本発表ではベンデ語 *Persistentive* の変種ごとの使い分けを示すとともに、特に3種類の意味の連続性について、Güldemann (1996, 1998) により議論された通バントゥ諸語の *Persistentive* の文法化による意味変化の *path* と、ベンデ語の事例とを比較する。

さらに、ベンデ語の *Persistentive* の形式・用法と、周辺バントゥ諸語の *Persistentive* を比較対照する。まず通バントゥ *Persistentive* の特徴から、類型化のための特徴を提案し、その特徴を基にベンデ語 *Persistentive* の特徴を示し、バントゥ諸語の歴史変化におけるベンデ語の位置について一仮説を提示する。

[H-3]

アッレ語の分析を通じた動詞枠付け言語の下位分類に関する一考察

吉野 宏志

アッレ語（アフロアジア語族、エチオピア）におけるイベント統合の表現パターンを Talmy (2000) の枠組で分析した結果、動詞枠付け言語（V 言語）に下位分類が存在するという Kawachi (2012) の主張を支持することが分かった。しかしながら、アッレ語はシダーマ語や日本語とほぼ同様に Talmy の V 言語の定義からの逸脱を見せるものの、動詞枠付けパターンを取る場合に共イベントの表現方法が形態統語的に異なっていることが明らかとなった。

シダーマ語と日本語では共イベントを副詞的な機能を持つ非主動詞で表すため [+verbal] であるが、アッレ語の場合は統語的に名詞として機能する動詞形を用いるため [-verbal] である。さらに日本語の場合は不定形動詞なので [-finite]、そしてアッレ語も [-finite] だが、シダーマ語は非主動詞にも主語一致標示が義務的なため定形動詞に近く [+finite] である。結論として、「V 言語の下位分類の基準として、共イベントの形態統語的性質も重要である」と主張する。

[H-4]

コプト・エジプト語の他動詞の「前名詞形」の軽動詞性と文法化

宮川 創

コプト・エジプト語の他動詞の「不定形」には「絶対形」のほかに「前名詞形」と「前人称形」の語形をもつものがある。「絶対形」の目的語には必ず「対格」前置詞が置かれるのに対し、「前名詞形」と「前人称形」の目的語は動詞に直接後続する。「絶対形」を基本形とみなすと「絶対形」の格標示は従属部標示型で、派生形である残りの2者は主要部標示型だといえる。本発表ではこのうち「前名詞形」の性質を論ずる。コプト語学者のなかには「前名詞形+目的語名詞」構文を「名詞抱合」だと捉えるものがある。形態類型論からみれば、主要部標示型であるという点は「抱合らしい」が、実際には名詞句も「抱合」されるためこの構文は「抱合らしくない」ことを示す。次に「前名詞形」には「絶対形」と異なる軽動詞的な語法があることを言語データから示す。最後に、「前名詞形」がどのような歴史的变化を辿ってきたのか迂言法の発達と絡めてエジプト語史から論ずる。

[H-5]

日本語動詞アクセントにおける活用形間対応制約の役割

クレメンス・ポッペ

本研究では、東京方言と松江方言におけるアクセント交替現象を検討することにより、活用形間対応制約の必要性を主張する。

第一に扱う現象は東京方言の現在形・過去形などに見られるアクセント・パターンである。東京方言では、「通る」のような語根の最後の母音が長母音である動詞 (*tóoru*) は、規則的なアクセント・パターンを持つ動詞 (*odóru*) に比べてアクセントが1モーラ前にずれる。これに対して、「チャーる」のような新しいタイプの動詞は、アクセントの位置が規則的なアクセント・パターンを持つ動詞と一致している (*chaáru*)。

次に扱う現象は松江方言に見られるアクセント交替である。松江方言では、*nagéta* と *okitá*, *mitá* を比べて分かるように、狭母音 (i, u) を含む音節へのアクセントの付与は避けられる。しかし、動詞活用形の一部 (*okíreba/okíra*, *míreba/míra*) では例外的に狭母音を含む音節にもアクセントが付与される。

以上の二つの現象を説明するために活用形間対応制約が必要であるということを示す。

[H-6]

奄美喜界島小野津方言の一人称代名詞の複数形

白田 理人

奄美喜界島方言の一人称代名詞複数形には二つの形式があり、除外／包括あるいはミウチ—同類的／非同類的（異類的）という区別として報告されてきた。発表者の調査により、喜界島小野津方言では、1人称複数形として、上記の二形式（*wannaa* と *waakja*）に加え、*ariwaakja* という形式も用いられることが分かった。

本発表はこの三つの形式が以下の機能上の区別を持つことを示す。

- *waakja* : 話し手と聞き手（のすべて）を含むグループを指す。
- *wannaa* : 話し手が含まれ、聞き手が含まれない（あるいは聞き手の一部しか含まれない）グループを指す。
- *ariwaakja* : 話し手と、（先行文脈に出てきているか、発話場面に存する）文脈上重要な特定の人物（もしくはグループ）が含まれ、聞き手が含まれない集団を指す。

一人称複数に同様の三項対立を持つ言語は管見の限り報告がなく、その記述は一人称複数の類型論的研究に資する。

[H-7]

間接疑問文と「補文性」—佐賀方言の疑問標識を例に—

日高 俊夫

本発表は、疑問補文標識とそれが導く文の性質を考察することによって、方言における間接疑問文（に見える構文）の意味的・構造的バリエーションを明らかにすることを目指す中で、例として佐賀方言を分析したものである。佐賀方言の疑問文を分析した研究としては、西垣内・日高（2010, 2013）や、それに基づき、Pierrehumbert and Beckman（1988）のモデルを用いてPFの具体的なメカニズムを提案した松井（2011）がある。これらの研究は疑問補文標識として「か」を用いているが、佐賀方言では、東京方言の「ことやら」にほぼ相当する「こっちゃい」という疑問標識が実際にひろく使用されている。本発表では、「こっちゃい」が、主文では東京方言の「やら」、補文位置では「か」にある程度相当するものの、それが導く節は東京方言の場合と比べて主動詞との結びつきが弱く、むしろ「注釈節」に近い存在であり、完全な補文構造を成していないことを示す。

■ポスター発表（6月8日(土) 11:30-12:50）

[P-1]

日英語における島の効果の実験的記述と比較

時本 真吾

Sprouse, Wagers, and Phillips (2012)は、島の効果を定量的に示す試みとして、英語の代表的な島（主語、付加詞節、複合名詞句、間接疑問文）について、wh 句の依存関係(主節・埋め込み節)と島の有無を操作し、母語話者に容認性判断を問う実験を行うことで、長距離依存の効果と島の効果を分離した。本研究は、彼らの実験文に直接対応する日本語文について、日本語母語話者に容認性判断を求め、同一の解析手法によって島の効果の日英語比較を行った。Sprouse ら(2012)は、各島について、wh 句の依存関係と島の有無の有意な交互作用を認めたが、本研究では、付加詞節、複合名詞句、間接疑問文について有意な長距離依存の効果が認められた一方、wh 句の依存関係と島の有無の交互作用は有意な水準に達しなかった。このことは、日本語での島の効果は英語に比して相対的に弱いことを示している。

[P-2]

沖縄語首里方言の語頭声門破裂音の機能負担量

花崗 悟

沖縄語首里方言で声門破裂音/ ʔ /は、「 ʔiN (犬) - iN (縁)、 ʔutu (音) - utu (夫)、 ʔNni (稲) - Nni (胸)」のように、それが無いもの (/l/) と対立する弁別の特徴をもつ音素として認定されている。本発表は 2 語以上を組み合わせた句あるいは文レベルで、語の弁別に語頭声門破裂音がどれほどの機能負担を果たしているのか、聴取実験によって調査を行ったものである。沖縄語学習歴のある東京方言話者が、声門破裂音の区別なしで発音した首里方言の音声 (ʔi kacuN [絵を描く] を i kacuN のように発音) を被験者 (首里方言話者) 6 名に聞かせ、対応する日本語を書いてもらった。結果として 2 語では 91% (10 のダミー句の正答率は 98%) 3 語以上では 98% (10 のダミー句の正答率は 100%) の正答率を得た。以上のことから、首里方言において語頭声門破裂音は句や文のレベルでは語の弁別に大きくは影響しないことが確認された。

[P-3]

語形成に関わる OCP 原則の役割について

西原 哲雄

語形成において用いられる言語学的要素としては、語や接辞が持つ語源的な素性である。例えば、英単語や接辞は、ラテン語系という素性指定を受ける語、またゲルマン語系という素性指定をうける語が存在し、この素性の一致によって語形成が説明される。

しかしながら、実際には、このような語などの持つ素性の一致においてのみ説明が可能ではなく、逆に同一素性の連続が語形成を阻止する場合が存在する。これは音韻論において提案された OCP による説明と同様である。

しかし、すべての語形成過程が素性の不一致の OCP によって説明が可能ではなく、冒頭で述べた素性の一致による語形成のほうが生産性が高く、OCP による語形成は一部においてその適用が容認されている。これは、音韻論における音韻変化現象である、多くの現象を説明する共時的な同化とその他の一部の例を説明する通時的な異化の関係との同様の対応関係であること本稿では論証する。

[P-4]

選択疑問文の分析 ～英語、中国語、日本語の比較から

伊藤 さとみ

本発表では、選択の接続詞の作用域が疑問演算子を超える現象について、英語、中国語、日本語を比較し、英語に対して提案されてきた wh 移動による分析が他の言語には適用しにくいことを指摘する。英語の “or” を含む疑問文 “Does John eat noodles or rice?” は多義的であり、選択疑問文の解釈と yes-no 疑問文の解釈がある。一方、中国語では、選択疑問文と yes-no 疑問文はそれぞれ異なる接続詞 (“還是”、“或者”) を用いて表される。さらに、日本語では、選択疑問文は節の並列「うどんを食べますか、ごはんを食べますか。」、yes-no 疑問文は名詞句の並列「うどんかごはんを食べますか。」で表される。英語の “or” の多義性については、その作用域を示す演算子の wh 移動による説明が提案されてきたが、中国語や日本語のデータからは、疑問演算子が選言命題を束縛する分析の方が適切であることを示す。

■ワークショップ（6月8日(日) 10:00-12:00)

[W-1]

名詞化とその周辺に存在する諸問題 —Malchukov (2006) の枠組みをもとにして—

企画：大西 秀幸，司会：吉岡 乾，コメンテーター：風間 伸次郎

一概に、品詞（語クラス）をまたいだ形態操作には、通言語的に共通して見られる傾向もあれば、個別言語・現象特有の思わぬ特徴を示すものもある。操作前の品詞だけを見ても操作後のだけを見ても記述が難しく、どちらを見てもなお難点が残る場合すらある。

本ワークショップでは、品詞を変える操作として最もありふれているであろう名詞化を題材にする。中央アジア以東のアジアの各所に分布しているウズベク語、ブルシャスキー語、ラワン語、モンゴル語、ニヴフ語において、名詞化にまつわるどのような現象があるか、問題提起をする趣旨で示していく。ワークショップを通して各言語における名詞化の概要を眺望しつつ、典型的にみる周辺的カテゴリの扱い難さ、形動詞が定動詞化をする傾向、SV/AOV 言語における名詞化の共通特徴などに特に注目して行く。

[W-1-1]

ウズベク語の動作名詞について

日高 晋介

本発表では、ウズベク語の動作名詞が派生であるのか屈折であるのか、あるいは派生・屈折以外であるのかという問題について議論する。Koptjevskaja-Tamm (1993: 5)による定義に従った動作名詞は、次の4つが挙げられる：*-(i)ʃ*, *-maslik*, *-mɔq*, *-(u)v*。Kononov (1960: 115-118)と Sjoberg (1963: 70-71)では、これらの動作名詞を「名詞」あるいは「派生名詞」として記述している。Bodrogligeti (2003: 212-223, 226-227, 570-575)は派生・屈折のどちらでも記述している。本発表では、Malchukov (2006)の二つの階層（動詞の脱範疇化階層と名詞への再範疇化階層）を用いて、四つの動作名詞が「品詞転換屈折」(Haspelmath 1996)であると結論付ける。

[W-1-2]

ブルシャスキー語の希求法不定詞とは何か

吉岡 乾

ブルシャスキー語には、希求法不定詞として扱われている形式がある。形態的には希求法定形の主語一致要素を失った形をしているのだが、その統語的振る舞いは（希求法でない）不定詞の一部用法と完全に重なっており、「希求法」的な意味を残してはいない。

本発表では、ブルシャスキー語における動詞の規則的名詞化形式の一種である、希求法不定詞として扱われている形態について、名詞化という観点からその実態の考察を試みる。加えて、希求法だとラベルを貼られている動詞形式自体の出自も考察する。結論としては、ブルシャスキー語の中で、i)「希求法不定詞」は確かに再範疇化の度合いの低い名詞化の形式ではあるのだが、ii)希求法と呼ばれているムードはより広い機能を示すものとして捉え直すべきであること、iii)そもそも「希求法不定詞」形が動名詞化の一種であったものが、定形動詞に発達したのだと考えられることの、3点を示す。

[W-1-3]

ラワン語における名詞節+コピュラ構文

大西 秀幸

ラワン語では、コピュラの直前に名詞節が現れ、事象の生起に対する話し手の確信度の高低を示すような構文が、LaPolla(2008, 2004)によって従来指摘されてきた。この種の構文のコピュラの前に現れる名詞節は、コピュラ述語に対する補語として分析される。しかし、実際の用例を観察すると、コピュラの前部要素を補語とする分析では、次の問題点を説明出来なくなることが分かる。(i) コピュラの否定形が作れない。(ii) 名詞節とコピュラの間に関節詞が挿入されうる。本発表では、先行研究でコピュラの名詞節が補語として分析されていることの妥当性を批判的に検証し、名詞節+コピュラ構文の名詞節が、補語ではなく述語であり、従来述語と分析されていたコピュラは、述語ではなく文を安定して終止させるための機能しかもたない付加的な要素であると主張する。

[W-1-4]

モンゴル語の形動詞接辞 $\cdot\text{r}\text{v}$ ー共時的な使用実態からー

山田 洋平

モンゴル語の動詞の屈折カテゴリーには形動詞形と呼ばれる形式がある。基本的に形動詞形は、当該の節を名詞化するという機能を担うとされる。形動詞接辞としては5～6種類ほど認められるが、中でも「～する人(主体)」といった意味を表す接辞 $\cdot\text{g}\text{f}$ ($\cdot\text{r}\text{v}$) という形式は、他の形動詞接辞とは性格を異にする。すなわちその実態は節を名詞化するというよりは語彙的な派生を担う派生接辞のようなものと考えるのが無難である。本発表では現代モンゴル語コーパスから用例を精査することで、この接辞が実際どのように使われているかについて述べる。当該形式は他の形動詞形と比して生産性が低く、Malchukov(2006)の枠組みで言う脱動詞化の度合いも高い。これらは並行的なもので、当該形式が共時的には語彙的な派生接辞であると考えべき根拠の一つと見る。

[W-1-5]

ニヴフ語のゼロ名詞化について ー間接疑問表現を中心にー

蔡 熙鏡

ニヴフ語は、総合的な (synthetic) 主要部後置型の言語である。名詞化のプロセスには、動詞語幹に名詞派生接尾辞を付加する形態論的な派生と、直説法の動詞形式をそのまま用いるいわゆるゼロ名詞化の方法がある。本発表では、まず Malchukov (2006) の枠組みを用いて、それぞれの名詞化に伴う脱範疇化と再範疇化の程度を示す。その後、名詞化されているかどうかの判断があいまいな場合として、[直説法の動詞形式 + 疑問小辞の $\cdot\text{lu}$] による間接疑問表現を取り上げる。母語話者への聞き取り調査およびテキスト調査の結果から、このような間接疑問表現は、名詞化された慣用表現であると結論付ける。

[W-2]

他動性の本質の解明 ―日本語と世界諸言語の対照研究から見えてくるもの―

企画：パルデシ・プラシヤント，司会：影山 太郎，コメンテーター：佐々木 冠

言語の記述において他動性は極めて重要な概念であり、古くから研究者の注目の的となっている。言語類型論の分野では Nedjalkov (1969) を皮切りに語彙的自他動詞対の形式的な関係における普遍性・多様性を究明する研究が盛んに行われるようになった。また、一般言語学では Hopper and Thompson (1980) の先駆的な研究をきっかけに他動性の段階性に関する研究が行われ始め、他動性は今なお活発に研究されているテーマであるものの多くの課題が残っている。他動性に寄与する要因などを明らかにしようとする研究や、他動性とボイス、アスペクト等のカテゴリーとの関係、自他動詞の習得等に関する研究が後を絶たない。

本ワークショップは他動性を研究テーマとする国立国語研究所主催共同研究プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」の成果の一部を以下の研究発表通じて報告するものである。

[W-2-1]

日本語と世界諸言語の対照研究から見えてくるもの

桐生 和幸

本発表では、他動性プロジェクトの成果論集の概要を簡単に述べ、その中で特に南アジアの言語のデータに焦点を当て、この地域の有対動詞の特徴と他動詞文・使役文に関する特徴を概観する。本論集は、主にユーラシア大陸の言語の有対動詞の形態的特徴や他動性について、言語ごとにまとめたものである。本プロジェクトでは、Haspelmath (1993) のリストに依拠した 31 の自他対の比較、および、独自のデータにもとづく比較を行っている。また、日本語との対照の観点から様々な点に言及がなされている。本発表では、論集中のギャロン語、メチェ語、ネワール語、ヒンディー語を取り上げ、優対動詞の形態的な派生関係について報告する。これらの言語を見ると、使役化による派生が優勢であることがわかり、言語系統を超え、地域的な傾向としてとらえることができる。

[W-2-2]

自他動詞の類型論 —認知的な説明から頻度に基づく説明へ—

ナロック・ハイコ

「動く・動かす」のような「他動化対」と「割る・割れる」のような「非他動化対」は、日本語の研究において従来から注目されているが、同じような動詞対が他にも多くの言語に存在し、言語類型論の分野では70年代から通言語的なデータに基づいて形態的に類型化する試みが続いている。関連する問題は様々あるが、本発表の焦点は、なぜある出来事がある言語で他動化対として表現され、他の出来事が非他動化対として表現されるかという点にある。項の有無が表面構造に類像的に反映されていないため、早くから (Haspelmath 1993) 認知言語学的な説明が試みられたが、通言語的に見られる表現類型の差を認知で説明するには限界がある。本発表では最近試みられている「使用基盤的」な説明、つまり使用頻度が形式を決定するという説明 (ナロック 2007; Haspelmath et al (to appear)) について紹介する。

[W-2-3]

有対自他動詞の地理類型論的なデータベース：
類型論的なパターン可視化および仮説の検証

パルデシ・プラシャント

日本語を始めとする世界の多くの言語には「壊れる・壊す」、「切れる・切る」などのような語彙的自他動詞対が多く存在する。Nedjalkov (1969)を皮切りに通言語的なデータに基づいて有対自他動詞間の形式的な関係を類型化する試みが盛んに行われている (Jacobsen 1985, Haspelmath 1993, Nichols et al. 2004; Comrie 2006)。国立国語研究所で推進されている「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」プロジェクトでは Haspelmath (1993)で提案されている31対の自他動詞を世界の40数言語で調査・分析した上で可視化した「有対自他動詞の地理類型論的なデータベース」を開発した。本発表ではこのデータベースを紹介し、Comrie (2006)で提案されている自他動詞間の派生の方向 (自動詞→他動詞、他動詞→自動詞) に関する仮説を検証する。